

不定表現による調整行為とその背景条件

久 保 進

松 山 大 学
言語文化研究 第34卷第1号 (抜刷)
2014年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 34 No. 1 September 2014

不定表現による調整行為とその背景条件

久 保 進

1. は じ め に

久保（2012a）では、会話において1人称の人称代名詞が用いられる発話のコンテキストにおいて1人称以外の人称代名詞が用いられる場合について、「志向性の前景化と背景化」という概念を用いて説明を行った。会話におけるこのような人称表現の選択は、1人称の人称代名詞に限らず、2人称あるいは3人称の代名詞についても該当する。しかも、代用される表現は、人称代名詞とは限らず指示代名詞や不定称の人称代名詞が用いられることもある。例えば、次の例では、話者は話題の人物を指示する場合に**指示対象との心的距離を取ろうとして〔調整行為〕**、固有名や3人称の人称代名詞の代わり遠称の指示代名詞「あれ」を用いている。

- (1) そのひだりが門口にいて、出たり入ったりしているのが見えた。どうも落ち着かぬげである。

「困ったことござる」ひだりはいきなり半蔵にいった。

「その、あれがきた」

「あれとは」

「藤林砦の女人でござるわい」

「みほどのか」

「そのようござる」ひだりはどうやら、軽々しくその名を呼ぶまいとしているらしい。 （戸部新十郎『服部半蔵（一）』）（下線は引用者）

ここでは、話者（＝ひだり）は、お館に近づけたくないとか、自身の立場を「みほ」に取って代わられたくないといった様々な心的理由で、指示対象が「みほ」であることを確信しているにもかかわらず、あたかも、確信していないかのごとく振る舞っている。

本稿の研究は、一つの語句に内在するモダリティ（lexical/phrasal intrinsic modality）の研究であるとともに、その言語表現が会話において使用される際の話者の志向性におけるモダリティ（modalities in intentionalities）の研究でもある。

本稿の目的は、会話における人称表現の選択に関して、1人称、2人称、あるいは、3人称といった定称の人称代名詞の代わりに不確定性（uncertainty）をその内在的特性として持つ「誰」、「何者」、「どなた」といった不定称の人称代名詞表現の選択に伴う志向性の前景化と背景化について考察すると共に、不定称の人称代名詞表現の選択に伴う調整に関して、調整理論の観点から考察を試みることにある¹⁾

尚、本稿では、Kubo (2013)、久保 (2014) に従って、調整理論を付加された言語行為論の枠組みにおいて表1のような、下付きで示すような意味タイプの論理述語を導入する。まず、言明述語 (assertive predicates) *Assert*, *Claim* は、それらの意味タイプは命題から個体の集合への関数 ($\langle\langle s, t \rangle, \langle e, t \rangle\rangle$) を表す。次に、調整行為動詞 *Background*, *Foreground*, *Respect* は、個体から命題への集合への個体概念の集合からの関数 ($\langle\langle s, e \rangle, t \rangle, \langle e, \langle s, t \rangle \rangle$) を表す。また、志向性を表す *Bel* (=believe), *Des* (=desire), *Int* (=intend), *Pretend*²⁾ は、命題から個体の集合への関数 ($\langle\langle s, t \rangle, \langle e, t \rangle\rangle$) を表す。最後に、確実性のモダリティ *Certain*, 義務のモダリティ *Must*, 評価形容詞のモダリティ *Good* は、命題から真理値への関数 ($\langle\langle s, t \rangle, t \rangle$) を表す。

1) 調整理論については、久保 (2012, 2013)、Kubo (2013)、久保 (2014) を参照されたい。

2) 補文命題の偽を前提とする述語である。

表 1

<i>Predicates</i>	Semantic Types in Intensional Logic	Pragmatics Categories
<i>assertives</i> <i>Assert</i> <i>Claim</i>	<<s, t>, <e, t>> <<s, t>, <e, t>>	[Illocutionary acts] <i>assertion</i> <i>claiming</i>
<i>Background</i> <i>Foreground</i> <i>Respect</i>	<<s, e>, t>, <e, <s, t>>> <<s, e>, t>, <e, <s, t>>> <<s, e>, t>, <e, <s, t>>>	[Regulatory acts] backgrounding forgrounding respecting
<i>assertives</i> <i>Bel</i> <i>Des</i> <i>Int</i> <i>Pretend</i>	<<s, t>, <e, t>> <<s, t>, <e, t>> <<s, t>, <e, t>> <<s, t>, <e, t>>	[Intentionalities] <i>belief</i> <i>desire</i> <i>intention</i> <i>pretense</i>
<i>assertives</i> <i>Certain</i> <i>Must</i> <i>Good</i>	<<s, t>, t> <<s, t>, t> <<s, t>, t>	[Modalities] <certainty> <obligation> <evaluation>

2. 不定称の人称代名詞

通例、「誰」などの不定称の人称代名詞の構成要素は、「問い」の発語内行為において用いられる。そして、その発語内行為の発語内目的は、不定称の人称代名詞の表現対象に関する未知の情報を得ることである。従って、その行為の遂行時点における志向性の状態は願望 (desire: *Des*) である。加えて、それらの代名詞は、その会話における使用において、その表現の表現対象である指示対象、名前や属性のうち、それらすべて、あるいは、そのいずれかについて、話者は未知であることを前提とする [予備条件]。そして、それらの情報は、他の会話参与者からの返答によって確定される。以上のことは、不定称の人称代名詞が、志向性におけるモダリティに関して、志向性としては願望を、そして、モダリティとしては不確定性を持つことを示唆している。

例えば、(2)の下線部の台詞は、人の気配を感じた話者が、それが誰かを「知りたいと願って」発したものであるが、この場合、話者は、「誰」の表現対象

の存在を確信しているが、その表現の指示対象、名前、属性については、いずれも未知で確信していない。

(2) …、鼻先の暗がりに人の気配がたった。

「誰だ、そこにおるのは」

ふわりと袂を靡かせて蝶のようにあらわれたのは、羽二重の振り袖を纏った年頃の娘である。

(坂岡真『大江戸人情小太刀』)(下線は引用者)

本稿では、以下、「誰」などの不定称の人称代名詞の表現対象(=WH)のうち、指示対象を WH_{ref} 、名前を WH_{nm} 、そして、属性を WH_{attrib} で表すものとする。言い換えると、表現対象は、指示対象、名前、そして、属性の複合体である。その場合、それらの意味タイプは、順に、個体(entity; <e>), 個体概念の属性の集合(set of properties of individual concepts; <<s, <<s, e>, t>>, t>), 個体概念の集合(set of individual concepts; <<s, e>, t>) である。

また、指示対象(WH_{ref})は、表現対象の指示対象の集合 $K1$ の要素³⁾($WH_{ref} \in K1$)であり、名前(WH_{nm})は、表現対象に付けられた名前の集合 $K2$ の要素⁴⁾($WH_{nm} \in K2$)である。また、 WH_{attrib} は、表現対象の属性の集合 $K3$ の要素($WH_{attrib} \in K3$)である。そして、これらの集合は話者の知識の集合(=KN)の部分集合を成す($K1 \subseteq KN$, $K2 \subseteq KN$, $K3 \subseteq KN$)と定義しておく。

そのような約束のもとでは、話者(=三左衛門)の発話時点(t_0)における不定称の表現対象に関わる志向性と志向性におけるモダリティは、概略、(2)のように表象することができる。

3) ただし、その表現が指示する対象は単一であるからこの集合は単一の要素から成る集合である。

4) ただし、指示対象に与えられた、字(あざな:元服の時に付けられる名前)と名、諱(いみな:諡号;死後に贈られる名前)、渾名(あだな:綽名)、通称、などからなる集合である。

(3)⁵⁾ [*Bel* (三左衛門, \wedge *Certain* (\wedge [$\exists x$ 居る(x)]) \wedge

\wedge *Certain* \sim (\wedge [$\text{WH}_{\text{ref}} \in K1 \wedge \text{WH}_{\text{nm}} \in K2 \wedge \text{WH}_{\text{attrib}} \in K3$])) $_{t_0}$) \wedge
Des (三左衛門, \wedge [$\text{WH}_{\text{ref}} \in K1 \wedge \text{WH}_{\text{nm}} \in K2 \wedge \text{WH}_{\text{attrib}} \in K3$])) $_{t_0 < t_r}$?)⁷⁾

併せて、(4)の事例を観察してみよう。この場合は、眼前の事態に接して発した台詞であるが、発話の時点では、誰が出てくるかは見えていない。尚、この場合、話者は、不定称の人称代名詞の表現対象の存在を知覚しているが、特段、それを知りたいとは思っていない（すなわち、自身の知識の要素であることを願っていない）。

(4) 「おや、どなたかお客様がお帰りのようだ」

と言いながら、堺屋は道の端に立ちどまった。三門に近付くにつれて、道はやや幅広くなり、小砂利を敷いてあった。

門内から静かに出てきたのは、一挺のお忍び駕籠で、屋根と腰が黒塗り、たくましげな陸尺二人がかついでいた。駕籠の両脇には若い女中が二人。清助と市兵衛につつましく目礼して通り過ぎた。女中が付いているから、駕籠の中の人物は女であろう。それも大身の旗本の奥方か、大名家の重い女中と思われる。

「ああいうお方が出入りされるので？」

5) *Bel* や *Des* は、命題から個体の集合への関数であるので、真理値の値を表す *Certain* (\wedge [$\exists x$ 居る(x)]) や [$\text{WH}_{\text{ref}} \in K1 \wedge \text{WH}_{\text{nm}} \in K2 \wedge \text{WH}_{\text{attrib}} \in K3$] の頭の所に ' \wedge ' (内包化演算子) が付加されている。また、*Certain* は、命題から真理値への関数であるので、真理値の値を表す [$\exists x$ 居る(x)] の頭の所に ' \wedge ' (内包化演算子) が付加されている。以下、本稿では、同様に扱う。尚、(3)の式は、「三左衛門は、発話の時点において、「誰かが居る」という命題内容が真であることは確かであるが、不定表現の指示対象も名前も属性も自身の知識の集合の要素でないことが確かであると信じており、それらが発話時以降の時点において、自身の知識の集合の要素であることを願っている」と読まれる。

6) また、この式における、*Certain* の後ろの " \sim " は、**命題否定** (propositional negation) として機能している (以下、同様)。脚注 22 も参照されたい。

7) この式における、 $t_0 < t_r$ は発話時以降の時点を表す。

清助はうなずいた。 (多岐川恭 『悪の絵草紙』) (下線は引用者)

従って、(4)における話者の発話時点における不定称の表現対象に関わる志向性と志向性におけるモダリティは、概略、(5)のように表象される。

(5)⁸⁾ [*Bel* (堺屋, \wedge *Certain* (\wedge [$\exists x$ 居る(x)]) \wedge
 \wedge *Certain* \sim (\wedge [$WH_{ref} \in K1 \wedge WH_{nm} \in K2 \wedge WH_{attrib} \in K3$]))_{t₀} \wedge
 \sim *Des*(堺屋, \wedge [$WH_{ref} \in K1 \wedge WH_{nm} \in K2 \wedge WH_{attrib} \in K3$]))_{t₀ < t_r})⁹⁾

それに対して、(6)では、下線部の発話は、話者が自身の居場所の近辺に他者の存在があるかどうか知りたくて確認しようとしている。このような場合も、話者にとっては、「誰」という代名詞の表現対象である指示対象、名前、属性のすべてが未知である。

(6) 「おーい、誰かおらぬのか！」
 大声を上げて、誰も応えない。

(芦川淳一 『雪消水』) (下線は引用者)

従って、(6)における話者の発話時点における不定称の表現対象に関わる志向性と志向性におけるモダリティは、概略、(7)のように表象される。

(7)¹⁰⁾ [*Bel* (茂兵衛, \sim \wedge *Certain* (\wedge [$\exists x$ 居る(x)]) \wedge

8) (5)の式は、「堺屋は、発話の時点において、「誰かが居る」という命題内容が真であることは確かであるが、不定表現の指示対象も名前も属性も自身の知識の集合の要素でないことは確かであると信じている。しかし、彼は、それらが発話時以降の時点において、自身の知識の集合の要素であることを願っているわけではない」と読まれる。

9) また、この式における、*Des*の前の“ \sim ”は、**志向性否認** (intentional denegation) として機能している (以下、同様)。脚注6、脚注22も参照されたい。

$$\wedge \text{Certain} \sim (\wedge [\text{WH}_{\text{ref}} \in \text{K1} \wedge \text{WH}_{\text{nm}} \in \text{K2} \wedge \text{WH}_{\text{attrib}} \in \text{K3}])_{\text{t}_0} \wedge$$

$$\text{Des}(\text{茂兵衛}, \wedge [\exists x \text{居る}(x)])_{\text{t}_0 < \text{tr}]$$

次の例では、下線部の歌詞には、月光仮面の属性については誰にとっても既知であるが、月光仮面の指示対象と名前については誰にとっても未知であると主張されている。しかし、この歌詞では、「誰」の表現対象を知りたいかどうかについては何ら表現されていない。付言すれば、この歌詞を通して作者が抱えている発話時の志向性の状態は、信念のみであって願望も**意図** (Intention) も関わっていない。

(8) どこの誰かは知らないけれど

誰もがみーんな知っている

月光仮面のおじさんは、正義の味方だ良い人だ、

疾風のように現れて

疾風のように去っていく

月光仮面は誰でしょう

月光仮面は誰でしょう

(川内康範『月光仮面は誰でしょう』) (下線は引用者)

従って、この場合、(8)における話者の発話時点における不定称の表現対象に関わる志向性と志向性におけるモダリティは、概略、(9)のように表象される。

$$(9)^{11}) \forall x [\text{PERSON}(x) \rightarrow \text{Bel}(x, \wedge \text{Certain}(\wedge [\exists y \text{居る}(y) \wedge x \neq y]) \wedge$$

$$\wedge \text{Certain} \sim (\wedge [\text{WH}_{\text{ref}} \in \text{K1} \wedge \text{WH}_{\text{nm}} \in \text{K2}]) \wedge$$

10) (7)の式は、「茂兵衛は、発話の時点において、「誰かが居る」という命題内容が真であることが確かでない信じている。しかも、彼は、不定表現の指示対象や名前や属性も自身の知識の集合の要素でないことが確かであると信じている。しかし、彼は、発話時以降の時点において、その命題内容が真であることを願っている」と読まれる。

$$^{\wedge}Certain (^{\wedge}[WH_{\text{attrib}} \in K3]))_{t_0}.$$

類例を見てみよう。この場合も、話者の発話時点における不定称の表現対象についての知識は、その属性についての知識のみで、指示対象ならびに名前は未知である。ただし、(8)の場合と違って、指示対象ならびに名前の該当者の集合は、限定されている。つまり、この場合は、「たれ」が実際に指示する対象は、**門人の集合に属する者のうちの誰か一人ということになる**。言い換えると、話者にとって「誰」の指示対象は門人であれば誰でもよい。従って、彼は、その不定称の人称代名詞の指示対象や名前を知りたいと願っているわけではない。

(10) 「たれかおこん様に知らせて参れ」

(佐伯泰英『石榴ノ蠅』)(下線は引用者)

従って、この場合、(10)における話者の発話時点における不定称の表現対象に関わる志向性と志向性におけるモダリティは、概略、(11)のように表象される。

$$\begin{aligned} (11)^{12} [Bel(\text{利次郎}, ^{\wedge}Certain (^{\wedge}[\exists x \text{居る}(x)])) \wedge \\ ^{\wedge}Certain \sim (^{\wedge}[WH_{\text{ref}} \in K1 \wedge WH_{\text{nm}} \in K2])) \wedge \\ ^{\wedge}Certain (^{\wedge}[WH_{\text{attrib}} \in K3]))_{t_0} \wedge \\ \sim Des(\text{利次郎}, ^{\wedge}[WH_{\text{ref}} \in K1 \wedge WH_{\text{nm}} \in K2]))_{t_0 < tr}. \end{aligned}$$

11) (9)の式は、「すべてのxに関して、xが人であれば、彼は、発話の時点において、「自分と違う誰かが居る」という命題内容が真であることは確かであるが、不定表現の指示対象も名前も自身の知識の集合の要素でないことも確かであると信じている。しかし、彼は、その属性が自身の知識の集合の要素であることは確かであると信じている」と読まれる。

12) (11)の式は、「利次郎は、発話の時点において、「誰かが居る」という命題内容と不定表現の属性が真であることを信じている。しかし、不定表現の指示対象や名前は自身の知識の集合の要素でないことが確かであると信じている。また、彼は、発話時以降の時点で、不定表現の指示対象や名前が自身の知識の集合の要素であることを願っているわけではない」と読まれる。

次に、(12)の事例を観察されたい。ここでは、腕に自信のある又四郎の「秋山大治郎、何するものぞ」「秋山大治郎、恐るるに足らず」という逸る気持ちが、()内の内言に表されている。このことは、「何者」の表現対象についての知識に関して、話者である又四郎が、指示対象と名前は既知であるが、属性は未知であることを示している。この場合、秋山大二郎の属性である力量は、勝負の結果、自ずと知れることである。従って、又四郎は、勝負に入る時点では取ってそれを知りたいと願っているわけではない。

(12) 又四郎は、小太刀を把って

(秋山大治郎、何者ぞ!!)

とばかり、立ち向かったが、三本のうち、一本も大治郎に打ち込むことはできなかった。(池波正太郎『待ち伏せ』)(下線は引用者)

従って、この場合、(13)における話者の発話時点における不定称の表現対象に関わる志向性と志向性におけるモダリティは、概略、(13)のように表象される。

$$(13)^{13)} [Bel(\text{又四郎}, \wedge[Certain(\wedge[WH_{ref} \in K1 \wedge WH_{nm} \in K2])_{t_0} \wedge \\ \wedge[Certain \sim(\wedge[WH_{attrib} \in K3])_{t_0} \wedge \\ \wedge[Certain(\wedge[WH_{attrib} \in K3])_{t_0 < t_f}] \wedge \\ \sim Des(\text{又四郎}, \wedge[WH_{attrib} \in K3])_{t_0}].$$

では、(14)の事例では、不定称の表現対象についての話者の知識は、どのようになるであろうか。次の例では、下線部の発話の話者(=北町奉行所与力頭

13) (13)の式は、「又四郎は、発話の時点において、不定表現の指示対象や名前が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じているし、その属性が自身の知識の集合の要素でないことが確かであると信じている。また、彼は、発話時以降の時点で、不定表現の属性が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じているが、発話の時点ではそれを望んでいるわけではない」と読まれる。

大崎兵衛)は、新たに得られた情報に基づき、これまで知っていると思っていた相手についてのすべての既知情報が不確かなものであると判断するに至り、改めて相手に対して未知情報を求めるために「何者」という問いを発している。つまり、話者は、宗次という名前〔通り名：通称〕を名乗っている相手を、眼前にしているから指示対象のみが確定情報である。しかし、彼の本名や、本当の身分といった正体を知らない。また、彼が浮世絵師であること〔属性情報〕も知っているが、それは、借りの姿であるかもしれないのである。

(14) 「宗次…… おめえ一体」

「へ？」

「おめえ一体…… 何者だ」 (門田泰明『命賭け候』) (下線は引用者)

従って、この場合、(14)における話者 (= 大崎) の発話時点における不定称の表現対象に関わる志向性と志向性におけるモダリティは、概略、(15)のように表象される。

(15)¹⁴⁾ [*Bel*(大崎, \wedge [*Certain*(\wedge [$WH_{ref} \in K1$]) \wedge
 \wedge [*Certain* \sim (\wedge [$WH_{nm} \in K2 \wedge WH_{attrib} \in K3$])])])]_{t₀} \wedge
Des(大崎, \wedge [$WH_{nm} \in K2 \wedge WH_{attrib} \in K3$])]_{t₀ < t}].

さて、(16)の次例を、考察してみよう。この場合の「どなた」は字義的には総称人称であるが、聴者を意識しての二人称指示である。従って、相手は、まだ名前を知らない眼前の定廻り同心である。故に、この場合は、話者にとって、表現対象の指示対象、属性は既知であるが、名前は未知ということになる。

14) (15)の式は、「大崎は、発話の時点において、不定表現の指示対象が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じているが、その名前や属性は自身の知識の集合の要素でないことが確かであると信じている。また、彼は、発話時以降の時点で、不定表現の名前と属性が自身の知識の集合の要素であることを望んでいる」と読まれる。

(16) 「おいらの料理は、やくざ者や武士にゃ食べさせたくねえんだ」という台詞が修次の十八番だった。

「ああ、どなたの前でも申しますぜ。これから常盤橋御門へお供いたしましょうかね」

不遜な板前風情を震え上がらせるつもりでやってきた北町奉行所の定廻り同心へ向かって啖呵を切り、いますんでのことに縄を打たれそとなったことすらある。 (小松重男『やっこ侍』) (下線は引用者)

従って、この場合、(16)における話者 (= 修次) の発話時点における不定称の表現対象に関わる志向性と志向性におけるモダリティは、概略、(17)のように表象される。

$$(17)^{15} [Bel(\text{修次}, \wedge Certain(\wedge [WH_{ref} \in K1 \wedge WH_{attrib} \in K3])) \wedge \wedge Certain \sim (\wedge [WH_{nm} \in K2]))_{t_0} \wedge \sim Des(\text{修次}, \wedge [WH_{nm} \in K2]))_{t_0 < t_f}.$$

最後に、(18)の事例を考察してみよう。これは、不定形容詞動詞「どんな」が後に名詞句をとって「どんな鬼」という不定名詞句を形成するケースである。この場合、話者は話題に上がっているが未だに立ち会ったことのない不定表現の表現対象の指示対象もその属性も未知で、名前のみが既知である。

(18) 彼らは、江戸に出て、盗賊仲間という〔畜生ばたらき〕をやるつもりだったが、

「その前に、鬼の平蔵とやらを叩き斬ってくれようではないか」

15) (17)の式は、「修次は、発話の時点において、不定表現の指示対象や属性が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じているが、その名前は自身の知識の集合の要素でないことが確かであると信じている。また、彼は、発話時以降の時点で、不定表現の名前が自身の知識の集合の要素であることを望んでいない」と読まれる。

「おもしろいな」

「どんな鬼なのか、ひとつ見とどけてくれよう」

「長谷川平蔵を討ち取れば、冥土の堀本先生も浮かばれようよ」

(池波正太郎『鬼平犯科帳 (二十一)』)(下線は引用者)

従って、この場合、(18)における話者 (= 浪人) の発話時点における不定称の表現対象に関わる志向性と志向性におけるモダリティは、概略、(19)のように表象される。

$$(19)^{16} [Bel(\text{浪人}, \wedge[Certain(\wedge[WH_{nm} \in K2]) \wedge \\ \wedge[Certain \sim (\wedge[WH_{ref} \in K1 \wedge WH_{attrib} \in K3])])])_{t_0} \wedge \\ Int(\text{浪人}, \wedge[WH_{ref} \in K1 \wedge WH_{attrib} \in K3])_{t_0 < t_1}] .$$

以上、9つの事例の観察をまとめると、(20)のようになる。

- (20) i. (2), (4), (6)の事例は WH_{ref} , WH_{nm} , WH_{attrib} の3者のいずれもが話者にとって未知である。
- ii. (8), (10)の事例では、 WH_{attrib} のみが話者にとって既知である。
- iii. (12)の事例では、 WH_{attrib} のみが話者にとって未知である。
- iv. (14)の事例では、話者にとって WH_{ref} のみが既知であり、他の表現対象は未知である。
- v. (16)の事例では、話者にとって WH_{ref} と WH_{attrib} が既知であり、 WH_{nm} は未知である。
- vi. (18)の事例では、話者にとって WH_{nm} のみ既知であり、 WH_{ref} と WH_{attrib}

16) (19)の式は、「浪人は、発話の時点において、不定表現の名前が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じているが、その指示対象や属性は自身の知識の集合の要素でないことが確かであると信じている。また、彼は、発話時以降の時点で、不定表現の指示対象と属性が自身の知識の集合の要素であることを意図している」と読まれる。

は未知である。

これらの観察は、不定称の人称代名詞は、それがその内在的特性として持つ不確実性に関して、WH_{ref}, WH_{nm}, WH_{attrib}の3者が、既知か未知かによる2³(=8)通りの組み合わせにより、表2に示すようにデジタル度の違いによる表象が可能であることを示唆する。

表2

WH _{ref}	WH _{nm}	WH _{attrib}	ケース
+	+	+	
+	+	-	(12)
+	-	+	(16)
+	-	-	(14)
-	+	+	
-	+	-	(18)
-	-	+	(8), (10)
-	-	-	(2), (4), (6)

尚、本稿では、WH_{nm}とWH_{attrib}が既知で、WH_{ref}が未知のケースについて例を挙げなかったが、その一例としては、(21)のように名前と特徴を知っている人を初めての場所に訪ねて発する場合の発話が想定できる。

(21) 「元岡山藩の藩士でご浪人の山田寒兵衛どのとは、どなたかな」(作例)

尚、WH_{ref}, WH_{nm}, WH_{attrib}のすべての情報が既知であるケースは、本来の不定称の人称代名詞の内在的特性である不確実性と抵触するケースである。このケースについては次節で詳細に検討する。

3. 指示対象・名前・属性情報が会話参与者にとり既知である場合

本節では、会話参与者にとって、指示対象、名前、属性という表現対象のすべて、あるいは、いずれかが未知の場合に用いられる「誰」などの不定称の人称代名詞が、それらの表現対象のいずれについても既知であるにもかかわらず用いられている諸事例を考察する。

話者は、使用する不定表現が誰を差すか、誰のことか、あるいは、どのような相手かを知りながら、聞き手に対して、あたかも知らないようにふるまっている。その意味で、このような不定表現の使用は調整行為である¹⁷⁾

以下、それぞれのケースについてこれらの調整行為の特性を明らかにする。

3.1. 不定表現が1人称に代用されるケース

3.1.1. 相手を威嚇する際に用いる決まり文句

次の引用では、下線部1の話者は、自身のことを指すのに「誰」を用いている。

彼は、自身のことであるから、すべてを知っている。つまり、WH_{ref}、WH_{nm}、WH_{attrib}のすべての情報が既知であるケースである。ここでは、彼は、字義的には、質問の発語内行為を遂行することで、**あたかも、自身にとってそれらが未知で、相手からそれらの情報を得ようとしているかのごとく振る舞っている**。しかし、彼の言語行為は、威嚇の間接的言語行為で、この台詞は威嚇の決まり文句である。話者は、自分たちが、町人の女になめられてはならないという気持ちから（＝恐れ入らせよう〔発語媒介行為〕と）、非字義的に、「**誰に向**

17) このことは、不定称の人称代名詞に限らず、次例に見るように、「何」が不定指示代名詞として用いられる場合にも該当する：「何度も寝返りを打っていたよ。何か気になることでもあるのかえ?」「いや、何でもねえ」（池波正太郎『鬼平犯科帳（二十四）』）。この事例は、自分と同盟の廻り髪結い盗賊改めの役宅への出入りを許されたことに関して、「もしや?」と気に掛かり、確信が持てないがために、何でもない振りをしているのである。従って、この場合も、「振りをする」という調整行為であると考えられる。

かってものを持っているか知らないであろう。知っていれば、そのような口のきき方は出来ないはずである」と反語的に主張しているのである。

(22) 「おい女、誰に向かってものをいっておる」

「誰って、あんたらさ、いまだき六法者なんぞ流行らないよ」

(坂岡真『大江戸人情小太刀』)(下線は引用者)

(23)¹⁸⁾ [*Bel*(中間, $\wedge Bel$ (女, $\wedge Certain$ ($\wedge [WH_{ref} \in K1]$) \wedge

$\wedge Certain \sim (\wedge [WH_{nm} \in K2 \wedge WH_{attrib 1} \in K3])$)]_{t0}].

一方、中間の脅しは、この場合、女(=おまつ)には通じていない。そのことは、女が、下線部2の台詞にあるように、中間たちの外見から、単なる大名家の渡り中間と見なし相手にしていないことから窺える。

(24)¹⁹⁾ [*Bel*(女, $\wedge Certain \sim (\wedge [WH_{nm} \in K2])$) \wedge

$\wedge Certain$ ($\wedge [WH_{ref} \in K1 \wedge WH_{attrib 2} \in K3])$)]_{t0}].

しかし、中間たちは、ただの中間ではなく大奥の権力者の配下である。従って、中間が自分たちの属性と考えている対象と、女が中間たちの属性と看做しているものとは、合致しない。意味的には、前者は後者を含意する(entail)。

(25) $WH_{attrib 1} \in K3 \text{ entails } WH_{attrib 2} \in K3$.

18) (23)の式は、「女が不定表現の指示対象が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じているが、その名前や属性は自身の知識の集合の要素でないことが確かであると信じていると、中間は発話の時点において信じている」と読まれる。

19) (24)の式は、「発話の時点において、女は不定表現の名前が自身の知識の集合の要素でないことが確かであると信じているが、その指示対象や属性は自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じている」と読まれる。

3.1.2. 自嘲の気持ちを伝えるケース

(26)の引用は、今津屋の老分由蔵と夜道を帰路についていた坂崎馨音が、前方に殺気を感じ、そのことを由蔵に伝えている場面である。馨音は、「恥を重んじよ」という儒教の精神〔背景条件 (Background Condition: BC)〕と「自身の恥は前景化にせよ、そして、他者の恥は背景化せよ」という行動規範 (Golden Rule: GR) に違反し、下線部1の発話で、始終剣客から勝負を挑まれる事態に由蔵を巻き込むことに対する詫びと自嘲の気持ちを照れと困惑の気持ちから、まるで他人事のように表明している。それに対して、そのような事態をさんざん経験している由蔵は、馨音の腕を信頼しきっており、そのような事態を恐れないで、軽口を返している。因みに、下線部1では、トラブルの要因を、馨音は不特定者に帰属させているが、下線部2では由蔵が、馨音に帰属させている。

(26) 「老分どの、相すまぬ」

「はて、坂崎様に謝られる覚えはございませぬがな」

1「たれが呼ぶのか、怪しげな待ち人が行く手を塞いでおります」

2「それはもう、いわずと知れた坂崎様にございますよ」

と幾多の危難を経験してきた今津屋の古狸がのたもうた。

(佐伯泰英『驟雨ノ町』)(下線は引用者)

(27)²⁰⁾ BC [処世訓]: $\forall x \forall y [\text{PERSON}(x) \wedge \text{IDEA OF SHAME}(y) \rightarrow \text{Must}(\text{Respect}(x, y))]$.

(28)²¹⁾ GR [恥]: $\forall x \forall y [\text{EGO}^{22)}(x) \wedge \text{OTHER}^{23)}(y) \rightarrow$

20) (27)の式は、「すべてのxとすべてのyに関して、xが人で、yが恥の概念であれば、xはyを尊重しなければならない」と読まれる。

21) (28)の式は、「すべてのxとすべてのyに関して、xが自己で、yが他者であれば、xは自身の恥を前景化し、他者の恥を背景化しなければならない」と読まれる。

$Must(\text{Foreground}(x, x\text{'s SHAME}) \wedge$
 $\text{Background}(x, y\text{'s SHAME}))].$

(自身の恥は前景化にせよ, そして, 他者の恥は背景化せよ)

この場合, 聲音の(27)に示す背景条件と(28)に示す行動規範をあえて破り, 発話時点における志向性と志向性におけるモダリティは, (29)のように表象される。

(29)²⁴⁾ [$Bel(\text{聲音}, \wedge \text{Certain}(\wedge[\text{WH}_{nm} \in K2 \wedge \text{WH}_{ref} \in K1 \wedge \text{WH}_{attrib} \in K3]) \wedge$
 $\wedge \text{Good}(\sim \text{Assert}(\text{聲音}, \wedge[\text{WH}_{nm} \in K2 \wedge \text{WH}_{ref} \in K1])))_{BC \times GR} \wedge$
 $\text{Pretend}(\text{聲音}, \wedge \text{Certain} \sim (\wedge[\text{WH}_{nm} \in K2 \wedge \text{WH}_{ref} \in K1]))]_{t_0}.$

3.2. 不定表現が2人称に代用されるケース

3.2.1. 暗に相手を褒め讃えるケース

次の引用における下線部の発話では, 普段から(31)のような「他人の面子は尊重しなければならない」という背景条件の下で, (32)に示す「自身の誉れは背景化にせよ, そして, 他者の誉れは前景化せよ」という行動規範を守っている聲音が, 自身の活躍により大捕り物が適ったことを口に出さないうで, 淡々と起こった事実を由蔵に報告している。一方, そのような聲音の生き方を熟知している由蔵は, 後続の発話で, 上記の行動規範をそのまま遵守して聲音の名前を前景化する代わりに, 行動規範を敢えて破り「どことのたれか」を用いて聲音の名前を背景化することで彼の活躍を讃えている。

22) EGO (自己) は話者を表す。

23) OTHER (他者) は聴者を含む話者以外の人を表す。

24) (29)の式は, 「聲音は, 発話の時点において, 不定表現の名前や指示対象や属性が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じている。しかし, 彼は, 所与の背景条件と行動規範の下ではその名前や指示対象が自身の知識の集合の要素であることを主張しないことが得策であると信じている。また, 彼は, 不定表現の名前や指示対象が自身の知識の集合の要素でないことが確かであるかのようなふりをしている」と読まれる。また, この式における, *Assert* の前の “ \sim ” は, 発語内否認 (illocutionary denegation) として機能している (以下, 同様)。

(30) 「鐘ヶ淵でえらい捕り物があつたようすな」

「笹崎孫一様直々のお出張りで、血覚上人一味や剣術家たちが大勢捕縛されました」

「どこぞのたれかが手練れの技を見せられたため、大騒動にはならずに着したそうですね」

「そんなこともありましたか」

(佐伯泰英『朔風ノ岸』)(下線は引用者)

(31)²⁵⁾ BC [処世訓] : $\forall x \forall y [EGO(x) \wedge OTHER(y) \rightarrow$
 $Must(Respect(x, y's\ FACE))]$.

(32)²⁶⁾ GR [誉れ] : $\forall x \forall y [EGO(x) \wedge OTHER(y) \rightarrow$
 $Must(Background(x, x's\ HONOR) \wedge$
 $Foreground(x, y's\ HONOR))]$.

(自身の誉れは背景化にせよ、そして、他者の誉れは前景化せよ)

従って、この場合、由蔵の(31)に示す背景条件の下で、(32)に示す行動規範をわざと破った発話時点における志向性と志向性におけるモダリティは、(33)のように表象される。

(33)²⁷⁾ [Bel(由蔵, ^Certain(^[WH_{nm} ∈ K2 ∧ WH_{ref} ∈ K1 ∧ WH_{attrib} ∈ K3])] ∧

25) (31)の式は、「すべてのxとすべてのyに関して、xが自己で、yが他者であれば、xはyの面子を尊重しなければならない」と読まれる。

26) (32)の式は、「すべてのxとすべてのyに関して、xが自己で、yが他者であれば、xは自身の誉れを背景化し、他者の誉れを前景化しなければならない」と読まれる。

27) (33)の式は、「由蔵は、発話の時点において、不定表現の名前や指示対象や属性が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じている。しかし、彼は、所与の背景条件と行動規範の下ではその名前や指示対象が自身の知識の集合の要素であることを主張しないことが得策であると信じている。また、彼は、不定表現の名前や指示対象が自身の知識の集合の要素でないことが確かであるかのようなふりをしてる」と読まれる。

$\wedge \text{Good} (\sim \text{Assert} (\text{由蔵}, \wedge [\text{WH}_{\text{nm}} \in \text{K2} \wedge \text{WH}_{\text{ref}} \in \text{K1}]))) \text{BC} \times \text{GR} \wedge$
 $\text{Pretend} (\text{由蔵}, \wedge \text{Certain} \sim (\wedge [\text{WH}_{\text{nm}} \in \text{K2} \wedge \text{WH}_{\text{ref}} \in \text{K1}]))) \text{to.}$

次の例も類似のケースである。この会話は、江戸城で日光社参の無事を祝う猿楽に招かれた今津屋吉右衛門が、その会場で馨音の父親を見かけたことを馨音に伝えている場面である。先の事例と同様、この場合も、(35)のような「他人の面子は尊重しなければならない」という背景条件の下で遂行されている。ここでは、吉右衛門は、(36)の「自身の誉れは背景化にせよ、そして、他者の誉れは前景化せよ」という行動規範をそのまま遵守して馨音の名前を前景化する代わりに、行動規範を取って破り不定称の敬称表現「どなた様」を用いて馨音の名前を背景化することで馨音の面目を立てるという発話効果を生みだそうとしている。

(34) 「日光社参の無事を祝う猿楽にお招きいただけるとは名誉なことにございました」

「坂崎様、遠くからですが佐々木玲圓先生をお見かけしました」

「先生は元幕臣、此度のことで苦勞なされました」

「玲圓先生のかたわらにおられたのは坂崎様のお父上様ではありませんか」

「大名家の隨身も招ばれましたか」

「いえ、見るかぎり玲圓先生と坂崎様のお父上らしい方だけでしたな」

「それはまた異例な」

「おそらく速水左近様の心遣いにございましょう」

「父上を速水様にお引き合わせしたことはございませぬが」

「どなた様かの代わりではございませぬか」

「はあっ」

と馨音は訝しい顔で返事をした。

(佐伯泰英『驟雨ノ町』)(下線は引用者)

(35=(31)) BC [処世訓] : $\forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow$
 $\text{Must}(\text{Respect}(x, y\text{'s FACE}))]$.

(36=(32)) GR [誉れ] : $\forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow$
 $\text{Must}(\text{Background}(x, x\text{'s HONOR}) \wedge$
 $\text{Foreground}(x, y\text{'s HONOR}))]$.

この場合、話者である吉右衛門の(33)に示す背景条件と(34)に示す行動規範を破った発話時点における志向性と志向性におけるモダリティは、(35)のように表象される。

(37)²⁸⁾ [Bel(吉右衛門, $\wedge \text{Certain}(\wedge [\text{WH}_{nm} \in K2 \wedge \text{WH}_{ref} \in K1 \wedge$
 $\text{WH}_{attrib} \in K3]) \wedge \wedge \text{Good}(\sim \text{Assert}(\text{吉右衛門},$
 $\wedge [\text{WH}_{nm} \in K2 \wedge \text{WH}_{ref} \in K1])))]_{BC \times GR} \wedge$
 $\text{Pretend}(\text{吉右衛門}, \wedge \text{Certain} \sim (\wedge [\text{WH}_{nm} \in K2 \wedge \text{WH}_{ref} \in K1]))]_{t_0}$.

3.2.2. 相手を讃えるケース

次の会話では、話者である老いた金兵衛は、普段一人で食事をしているために食が細くなってしまっている。そのような彼は、若い聲音の旺盛な食欲に驚き下線部の発話を遂行している。彼は、「食欲があることは良いことだ」という社会的通念〔背景条件〕の下で、「自身の誉れは背景化にせよ、そして、他者の誉れは前景化せよ」という(38)の行動規範を遵守して聲音の名前を前景化しないで、行動規範を取って破り「もりもり食べるお方」と呼んで聲音の名前を

28) (37)の式は、「吉右衛門は、発話の時点において、不定表現の名前や指示対象や属性が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じている。しかし、彼は、所与の背景条件と行動規範の下ではその名前や指示対象が自身の知識の集合の要素であることを主張しないことが得策であると信じている。また、彼は、不定表現の名前や指示対象が自身の知識の集合の要素でないことが確かであるかのようなふりをしている」と読まれる。

背景化することで軽口の発話効果を生みだそうとしている。

(38) 「おや、大家どのは素麺がおきらいですか」

「嫌いではないが、この暑さではそうそう食も進みません。それでも一人で食べるときの倍は食べた。残りは坂崎さんがお食べなされ」

「よろしいので」

「若いとはかようなことですかな、久しくもりもり食べるお方をわすれて
おりました」 (佐伯泰英『朝虹ノ島』) (下線は引用者)

(39)²⁹⁾ BC [社会的通念] : $\forall x[\text{PERSON}(x) \rightarrow$

$\text{Good}(\text{HAVE-A-BIG-APPETITE}(x))]$.

(人が食欲があることは良いことである)

(40)=(32) GR [誉れ] : $\forall x \forall y[\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow$

$\text{Must}(\text{Background}(x, x\text{'s HONOR}) \wedge$

$\text{Foreground}(x, y\text{'s HONOR}))]$.

この場合、金兵衛の(39)に示す背景条件の下で、(40)に示す行動規範を破った発話時点における志向性と志向性におけるモダリティは、(41)のように表象される。

(41)³⁰⁾ [$\text{Bel}(\text{金兵衛}, \wedge \text{Certain}(\wedge[\text{WH}_{\text{nm}} \in \text{K2} \wedge \text{WH}_{\text{ref}} \in \text{K1} \wedge \text{WH}_{\text{attrib}} \in \text{K3}])) \wedge$
 $\wedge \text{Good}(\sim \text{Assert}(\text{金兵衛}, \wedge[\text{WH}_{\text{nm}} \in \text{K2} \wedge \text{WH}_{\text{ref}} \in \text{K1}])))]^{\text{BC} \times \text{GR}} \wedge$

29) (39)の式は、「すべての x とすべての y に関して、 x が人で、 y が食欲であれば、 x は y を持つことは良いことである」と読まれる。

30) (41)の式は、「金兵衛は、発話の時点において、不定表現の名前や指示対象や属性が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じている。しかし、彼は、所与の背景条件と行動規範の下ではその名前や指示対象が自身の知識の集合の要素であることを主張しないことが得策であると信じている。また、彼は、不定表現の名前や指示対象が自身の知識の集合の要素でないことが確かであるかのようなふりをしている」と読まれる。

Pretend (金兵衛, \wedge Certain \sim (\wedge [WH_{nm} \in K2 \wedge WH_{ref} \in K1]))_{t₀}.

3.3. 不定表現が3人称に代用されるケース

3.3.1. 公言が憚られるケース

次の例は、幕閣内の力学に類する公おおやけの対人関係あるいは権力構造において、公言することが憚られるケースである。人が幕閣の一員であるということは名誉なことで、その人を讃えるときには、その人を特定化できる固有名や職名を用いて前景化される。これは、(44(ii))の「自己の誉れは背景化せよ、他者の誉れは前景化せよ」という行動規範を遵守することである。しかし、(42)の場合、発話者は、この不定表現の表現対象に敵対する立場にあり、名を出すことすら忌み嫌っている。具体的には、町奉行でしかない話者である松前が、時の老中に逆らうことはできない。彼は、発話の時点で、甲州屋の抗議の火付けに腹を立てた人物の名前もその指示対象も田沼意次であることを知っているにもかかわらず、それらを知らないかのように振る舞うしか術はない。そのようなコンテキストでは、(43)に示す封建時代の処世訓「長いものには巻かれる」[背景条件]の下で、この行動規範は敢えて遵守されずに表現対象は背景化されている。名誉な職階が不名誉なもの、すなわち恥と捉えられており、二次的には、(44(ii))の「自己の恥は前景化せよ、他人の恥は背景化せよ」という行動規範に充当することになる。

(42) 「首吊りじゃ、牢には首をくくる綱などなかったのにな。どなたかが甲州屋の抗議の火付けに腹を立てられたようじゃとしかわしの口からは申せん」

町奉行が恐れるほどの人物か。

総兵衛は平伏して、松前に感謝した。

(佐伯泰英『死闘』)(下線は引用者)

$$(43)^{31} \text{ BC [処世訓]} : \forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \wedge \text{SUPERIOR-TO}(y, x) \rightarrow \\ \text{Must}(\sim \text{FIGHT-AGAINST}(x, y))].$$

(長いものには巻かれろ)

$$(44) \text{ (i = 32) [誉れ]} : \forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y)] \rightarrow \\ \text{Must}(\text{Background}(x, x\text{'s HONOR}) \wedge \\ \text{Foreground}(x, y\text{'s HONOR})).$$

$$(ii = 28) \text{ [恥]} : \forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y)] \rightarrow \\ \text{Must}(\text{Foreground}(x, x\text{'s SHAME}) \wedge \\ \text{Background}(x, y\text{'s SHAME})).$$

従って、話者である松前の(43)に示す背景条件と(44)に示す行動規範を遵守しない発話時点における志向性と志向性におけるモダリティは、(45)のように表象される。

$$(45)^{32} [\text{Bel}(\text{松前}, \wedge \text{Certain}(\wedge [\text{WH}_{\text{nm}} \in \text{K2} \wedge \text{WH}_{\text{ref}} \in \text{K1} \wedge \text{WH}_{\text{attrib}} \in \text{K3}])) \wedge \\ \wedge \text{Good}(\sim \text{Assert}(\text{松前}, \wedge [\text{WH}_{\text{nm}} \in \text{K2} \wedge \text{WH}_{\text{ref}} \in \text{K1}])))]^{\text{BC} \times \text{GR}} \wedge \\ \text{Pretend}(\text{松前}, \wedge \text{Certain}(\sim (\wedge [\text{WH}_{\text{nm}} \in \text{K2} \wedge \text{WH}_{\text{ref}} \in \text{K1}])))]_{\text{t}_0}.$$

3.3.2. 明言が憚られるケース

次の例は、^{わたくし}私の対人関係において明言することが憚られるケースである。

31) (43)の式は、「すべてのxとすべてのyに関して、xが自己で、yが他者で、かつyがxよりも優勢な立場にあるとすると、xはyに逆らってはならない」と読まれる。

32) (45)の式は、「松前は、発話の時点において、不定表現の名前や指示対象や属性が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じている。しかし、彼は、所与の背景条件と行動規範の下ではその名前や指示対象が自身の知識の集合の要素であることを主張しないことが得策であると信じている。また、彼は、不定表現の名前や指示対象が自身の知識の集合の要素でないことが確かであるかのようなふりをしている」と読まれる。

この場合、「どなた」という不定称表現が長い浪人生活から武士としての矜持どころか恥も外聞も捨て不作法な振る舞いに及び常時品川に面倒をかけている竹村を指すことは、話者（由蔵）も聴者（品川）も了解している。本来であれば、(47(i)「謹厳実直を重んじよ」という社会的通年の下で、(48(i)「自身の誉れは背景化にせよ、そして、他者の誉れは前景化せよ」という行動規範を遵守して品川の働きの内容を詳らかにして讃えるところである。しかし、そうすること（すなわち、「どなた」を「竹村様」と明言すること）は、(47(ii)「恥を重んじよ」という処世訓と(47(iii)「成人男性は自立しなければならない」という社会的通念〔ともに背景条件〕の下では、竹村を必要以上に蔑むことになる。由蔵はその辺りを気遣って、上記の行動規範を遵守せず軽口の中に不定称表現を用いているのである。ここには、言語行為の遂行に対して外在的制約として働く複数の行動規範の間に行動規範間衝突という現象が垣間見られる。

- (46) 「坂崎さん、それがしも屋敷に帰ります。昨日より屋敷を空け、母上が心配しておられましようから」
 「お二人ともなかなかの女房孝行、親孝行ですな」
 「お二人には今年もお世話になりました。年越しの蕎麦代をお納めください」
 「普段から十分に頂戴しております。お気持ちだけを頂きます」
 「品川様には蕎麦代と考えるよりはどなたかのお守り賃。遠慮のう納めてください」
 （佐伯泰英『捨雛ノ川』）（下線は引用者）

(47) BC [処世訓／社会的通念] : (i)&(ii)

(i)³³ BC [社会的通念] : $\forall x[\text{PERSON}(x) \wedge \text{BE-DILIGENT}(x) \rightarrow \text{Must}(\text{Be-Respected}(x))]$.

33) (47(i)の式は、「すべてのxに関して、xが人で、謹厳実直であるならば、xは尊敬されなければならない」と読まれる。

$$(ii)(=27) \quad BC \text{ [処世訓]} : \forall x \forall y [\text{PERSON}(x) \wedge \text{IDEA OF SHAME}(y) \rightarrow \\ \text{Must}(\text{Respect}(x, y))].$$

$$(iii)^{34} \quad BC \text{ [社会的通念]} : \forall x [\text{ADULT-MALE}(x) \rightarrow \\ \text{Must}(\text{INDEPENDENT}(x))].$$

(成人男性たるものは、自立しなければならない)

$$(48) \quad ((i)=(32)) \quad GR \text{ [誉れ]} : \forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow \\ \text{Must}(\text{Background}(x, x\text{'s HONOR}) \wedge \\ \text{Foreground}(x, y\text{'s HONOR}))].$$

$$((ii)=(28)) \quad GR \text{ [恥]} : \forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow \\ \text{Must}(\text{Foreground}(x, x\text{'s SHAME}) \wedge \\ \text{Background}(x, y\text{'s SHAME}))].$$

従って、話者である由蔵の(47)に示す背景条件の下で、(48)に示す行動規範に則った発話時点における志向性と志向性におけるモダリティは、(49)のように表象される。

$$(49)^{35} \quad [Bel(\text{由蔵}, \wedge \text{Certain}(\wedge [\text{WH}_{nm} \in K2 \wedge \text{WH}_{ref} \in K1 \wedge \text{Wh}_{attrib} \in K3])) \wedge \\ \wedge \text{Good}(\sim \text{Assert}(\text{由蔵}, \wedge [\text{WH}_{nm} \in K2 \wedge \text{WH}_{ref} \in K1])))]_{BC \times GR} \wedge \\ \text{Pretend}(\text{由蔵}, \wedge \text{Certain}(\sim (\wedge [\text{WH}_{nm} \in K2 \wedge \text{WH}_{ref} \in K1])))_{t_0}.$$

34) (47)(iii)の式は、「すべてのx に関して、x が成人男性であるならば、x は自立しなければならない」と読まれる。

35) (49)の式は、「由蔵は、発話の時点において、不定表現の名前や指示対象や属性が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じている。しかし、彼は、所与の背景条件と行動規範の下ではその名前や指示対象が自身の知識の集合の要素であることを主張しないことが得策であると信じている。また、彼は、不定表現の名前や指示対象が自身の知識の集合の要素でないことが確かであるかのようなふりをしている」と読まれる。

3.3.3. 皮肉を伝えるケース

「どこのどなたさん」という言い回しは、「どこのどなたさんか存じ上げませんが…」のように、話者が、眼前の初対面の相手に対して謝意を表明するときなどに用いる。従って、話者はこの不定表現の指示対象が眼前の人物であることを知っている。その意味で、指示対象は話者にとって既知である。しかし、その指示対象の名前と属性は話者にとって未知である。それに対して、(50)では、「どこぞのどなたさん」の指示対象が、「宮戸川の職人幸吉」であり、かつ、幸吉がどのような属性を持つかも、この会話のコンテキストにいる、すべての会話参加者にとって既知である。それでは、話者は、その指示対象が幸吉であることがわかっているのに、何故に、固有名を用いて、「幸吉に、おそめの爪の垢を煎じて飲ませたいものだ」とか「幸吉はおそめの爪の垢でも煎じて飲んだらうだ」と言わずに、不定表現を含む発話を遂行しているのであろうか。それは、発話の時点において、鉄五郎は、(51)の「奉公人は徒弟制を尊重しなければならない」という封建時代の徒弟制の背景条件のもとで、奉公人（APPRENTICE）の行動規範への奉公人たちの取り組みの違いを危惧して、発話を遂行しているからである。徒弟制において、親方にとって自分の弟子は子も同然であり、弟子にとって親方は親も同然である。そのような背景において、自分の弟子を叱る場合には、遠慮なくその恥を前景化する。一方、他人の弟子を叱る場合には、遠慮してその恥を背景化する。(50)の場合、鉄五郎は、一向に態度の改まらぬ愛弟子の幸吉を突き放すかたちで叱っている。この場合、鉄五郎は、(52)の「自分（の弟子）の恥は前景化せよ、他人（の弟子）の恥は背景化せよ」という行動規範を敢えて遵守しないで、不定表現を用いて幸吉を戒めようとしている。

(50) 「一年、ご苦労だったな」

鉄五郎が辛い、おそめが、

「親方、お世話をかけました。これからはほんとうの修行でございます、惑うような時がございましたら、きついお叱りをお願いします」

と挨拶した。

「その爪の垢を、どこぞのどなたさんに煎じて飲ませたいもんだ。おそめならなんの心配もあるめえ」

「親方、私だってだいぶましになりましたよね」

幸吉がかたわらから言い、

「まだ身に染みているとは言い難いな」

(佐伯泰英『捨雛ノ川』)(下線は引用者)

(51)³⁶ BC [制度] : $\forall x \forall y [\text{APPRENTICE}(x) \wedge \text{APPRENTICESHIP}(y) \rightarrow \text{Must}(\text{Respect}(x, y))]$.

(52) (ii)(=28) GR [恥] : $\forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y)] \rightarrow \text{Must}(\text{Foreground}(x, x\text{'s SHAME}) \wedge \text{Background}(x, y\text{'s SHAME})]$.

この場合、鉄五郎の(51)に示す背景条件と(52)に示す行動規範を破った発話時点における志向性と志向性におけるモダリティは、(53)のように表象される。

(53)³⁷ [$\text{Bel}(\text{鉄五郎}, \wedge \text{Certain}(\wedge [\text{WH}_{nm} \in K2 \wedge \text{WH}_{ref} \in K1 \wedge \text{Wh}_{attrib} \in K3])) \wedge \wedge \text{Good}(\sim \text{Assert}(\text{鉄五郎}, \wedge [\text{WH}_{nm} \in K2 \wedge \text{WH}_{ref} \in K1]))]_{\text{BC} \times \text{GR}} \wedge \text{Pretend}(\text{鉄五郎}, \wedge \text{Certain} \sim (\wedge [\text{WH}_{nm} \in K2 \wedge \text{WH}_{ref} \in K1]))]_{\text{t0}}$.

36) (51)の式は、「すべてのxとすべてのyに関して、xが弟子で、yが徒弟制度であるならば、xはyを尊重しなければならない」と読まれる。

37) (53)の式は、「鉄五郎は、発話の時点において、不定表現の名前や指示対象や属性が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じている。しかし、彼は、所与の背景条件と行動規範の下ではその名前や指示対象が自身の知識の集合の要素であることを主張しないことが得策であると信じている。また、彼は、不定表現の名前や指示対象が自身の知識の集合の要素でないことが確かであるかのようなふりをしてる」と読まれる。

次の例は女子が職人の世界に足を踏み入れることが極めて困難な封建的徒弟制の時代に、おそめが縫箔屋に弟子入りがかなったことを内々で祝うために、親しい者たちがおそめの幼なじみの幸吉が職人として働く鰻処「宮戸川」に集う場面である。下の下線部の発話は、焼き職人である進作が後輩の鰻割き職人である幸吉の喜ぶ姿を想像し、自分のことのようにその喜びを表現したものである〔共感の調整行為〕。ここでは、進作は、「仲間の間で互いの喜びを共有することは良いことだ」という社会的通念〔背景条件〕の下で、「自身の喜びは背景化せよ、そして、他者の喜びは前景化せよ」という行動規範を遵守して「幸吉のやつ」と固有名を出す代わりに、行動規範を敢えて遵守しないでからかいの気持ちをまじえてこの不定表現の言い回しを発話に選択している。

- (54) おこんとおそめを先に上がらせ、磐音が船賃と酒手を払って河岸道に上がると、焼き職人の進作が、
「いらっしやい」
とおこんらを迎えたところだった。
「親方には朝から頼んであった」
「へえっ、承知していまさあ。知らぬは誰かばかりなりってね。おそめちゃんの姿見たらぶっ魂消ますぜ」
幸吉のことに進作が触れた。 (佐伯泰英『捨雛ノ川』) (下線は引用者)

(55)³⁸⁾ BC [社会的通念] : $\forall x \forall y [EGO(x) \wedge OTHER(y) \rightarrow$
 $Good (SHARE(x, y's PLEASURE))]$.

(56)³⁹⁾ GR [喜び] : $\forall x \forall y [EGO(x) \wedge OTHER(y) \rightarrow$

38) 55の式は、「すべてのxとすべてのyに関して、xが自己で、yが他者であるならば、xがyの喜びを分かち合うことは良いことである」と読まれる。

39) 56の式は、「すべてのxとすべてのyに関して、xが自己で、yが他者であるならば、xは自身の喜びを背景化し、他者の喜びを前景化しなければならない」と読まれる。

Must (*Background* (x, x 's PLEASURE) \wedge
Foreground (x, y 's PLEASURE))].

(自身の喜びは背景化せよ, そして, 他者の喜びは前景化せよ)

また, 進作の(55)に示す背景条件と(56)に示す行動規範に破った発話時点における志向性と志向性におけるモダリティは, (57)のように表象される。

(57)⁴⁰ [*Bel* (進作, \wedge *Certain* (\wedge [$WH_{nm} \in K2 \wedge WH_{ref} \in K1 \wedge WH_{attrib} \in K3$]) \wedge
 \wedge *Good* (\sim *Assert* (進作, \wedge [$WH_{nm} \in K2 \wedge WH_{ref} \in K1$])))]_{BC \times GR} \wedge
Pretend (進作, \wedge *Certain* (\sim (\wedge [$WH_{nm} \in K2 \wedge WH_{ref} \in K1$])))]_{t0}.

最後の事例は, 文之助が, 事件解決の糸口を遊び仲間の子どもから得たことを先輩同心の石堂が知って遂行した発話である。この発話では, 「仲間の間では互いの喜びを共有することは良いことだ」という社会的通念〔背景条件〕の下で, 石堂が, (60a)の「自身の誉れは背景化にせよ, そして, 他者の誉れは前景化せよ」という行動規範を尊重することで文之助を持ち上げているが, それとは対照的に, 彼は, 下線部1, 2の発話では, (60b)の「自身の恥は前景化にせよ, そして, 他者の恥は背景化せよ」という行動規範を敢えて破ることで指示対象者 (= 鹿戸) を笑いものにしている。

(58) 「なるほど, 一緒に遊んでいた子供が発端か。でも, 探索の仕事だって運を味方につけなきゃ, うまくいくはずもないからな。それに, おまえが子供に好かれているっていう事実ははずせんよな。もしほかの誰かさんだっ

40) (57)の式は, 「進作は, 発話の時点において, 不定表現の名前や指示対象や属性が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じている。しかし, 彼は, 所与の背景条件と行動規範の下ではその名前や指示対象が自身の知識の集合の要素であることを主張しないことが得策であると信じている。また, 彼は, 不定表現の名前や指示対象が自身の知識の集合の要素でないことが確かであるかのようなふりをしている」と読まれる。

たら、そんなこと、決してあり得んものな」

2誰かさんてのはいわずともわかるだろ、といたげな顔で笑いかけてく
る。

3文之助は苦笑いを返し、茶を飲んだ。

(芦川淳一『雪消水』) (下線は引用者)

この場合、この発話の話者は石堂であり、聴者は文之助である。下線部2と下線部3のト書きは、下線部1の「誰かさん」が誰を指すことを知っていることを示している。

(59=(55)) BC [社会的通念]: $\forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow$
 $\text{Good}(\text{SHARE}(x, y\text{'s PLEASURE}))]$.

(60) a. (=32) GR [誉れ]: $\forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow$
 $\text{Must}(\text{Background}(x, x\text{'s HONOR}) \wedge$
 $\text{Foreground}(x, y\text{'s HONOR}))]$.

b. (=28) GR [恥]: $\forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow$
 $\text{Must}(\text{Foreground}(x, x\text{'s SHAME}) \wedge$
 $\text{Background}(x, y\text{'s SHAME}))]$.

従って、石堂の(59)に示す背景条件と(60)に示す行動規範を破った発話時点における志向性と志向性におけるモダリティは、(61)のように表象される。

(61)⁴¹⁾ [$\text{Bel}(\text{石堂}, \wedge \text{Certain}(\wedge [\text{WH}_{\text{nm}} \in \text{K2} \wedge \text{WH}_{\text{ref}} \in \text{K1} \wedge \text{WH}_{\text{attrib}} \in \text{K3}]) \wedge$
 $\wedge \text{Good}(\sim \text{Assert}(\text{石堂}, \wedge [\text{WH}_{\text{nm}} \in \text{K2} \wedge \text{WH}_{\text{ref}} \in \text{K1}])))) \text{BC} \times \text{GR} \wedge$
 $\text{Pretend}(\text{石堂}, \wedge \text{Certain}(\sim (\wedge [\text{WH}_{\text{nm}} \in \text{K2} \wedge \text{WH}_{\text{ref}} \in \text{K1}])))] \text{to}$.

3.4. 本節のまとめ

本節では、会話参与者にとって、指示対象、名前、属性という表現対象のすべて、あるいは、いずれかが未知の場合に用いられる「誰」などの不定称の人称代名詞が、それらの表現対象のいずれについても既知であるにもかかわらず用いられている事例を考察した。


これらのケースでは共通して、**背景条件の下での行動規範が遵守されていない**。ここでは、話者は**知っていながら知らないそぶり**を決め込んでいる。この**決め込み**は調整行為であり、表3のように表示することができる。

また、それぞれのケースに関して、「決め込み」の要因は、それぞれの発話が遂行される外在的特性である背景条件と行動規範であった。いうまでもなく、背景条件は、Searle (1995) が指摘するように歴史、文化、時代、地域などによって千差万別であり一般化しにくい百科辞典的知識であり、人間の経験則や宗教観により導かれた処世訓や社会的通念と人々の共同生活における取り決めや官からの下命により定められた制度などが含まれる。それに対して、行動規範は、有限個で一般化が可能であると思われる。本稿では、Leech (1980)⁴²⁾ のように、経済性の原則 (The Principle of Economy) ではなく、久保 (2012) で提案した志向性の前景化と背景化 (Foregrounding and Backgrounding of Intentionality) の理論を用いて、その一端を紹介した。ここでは、恥、誉れ、喜び、美德という概念が話者自身にとってのものか、それとも他者にとってのものかによって話者が背景化を図ることを仮定している。

41) 61)の式は、「石堂は、発話の時点において、不定表現の名前や指示対象や属性が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じている。しかし、彼は、所与の背景条件と行動規範の下ではその名前や指示対象が自身の知識の集合の要素であることを主張しないことが得策であると信じている。また、彼は、不定表現の名前や指示対象が自身の知識の集合の要素でないことが確かであるかのようなふりをしてい」と読まれる。

42) Leech (1980) についての対照語用論における評価は、Spencer-Oatey (2009) を参照されたい。

表3

WH _{ref}	WH _{nm}	WH _{attrib}	調 整
+	+	+	
-	-	+	

4. 関連表現「さる方」

本節では、表現対象を表すのに、話者が固有名詞や定称の人称代名詞を用いずに「さる方」(=然るべき筋の方: certain person)という限定対象を表す表現について考察する⁴³⁾この表現は「さる筋からの話ですが」の「さる筋」と同様に、話者は、その対象がどこであり、誰であるかなどの情報を持っている。すなわち、話者にとっては通例既知である。一方、聴者にとっては、必ずしも既知ではない。以下、本節では、この表現と、「誰」や「どなた」といった不定称の人称代名詞との差異を明らかにする。

4.1. 「さる方」は話者にとって常に既知情報か

前節で考察した、「誰」や「どなた」の表現対象は、話者にとって、指示対象も名前も属性も既知情報であった。それでは、「さる方」の表現対象は、どうであろうか。以下の事例を考察してみよう⁴⁴⁾

まず、62)の下線部1の発話の「さるお方」は、話者(=聲音)と聴者の双方にとって、その指示対象、名前、属性のいずれもが既知の情報である。そのこ

43) 「さる」は「さ(然)り」の連体形から生じた表現。

44) 次の事例では、不定称の人称代名詞のかわりに「～というお方」という型が用いられている。話者は、名前については既知であるが、まだ会っていないし素性も知らない。従って、指示対象ならびに属性については未知である。「容齋というお方、お坊様ではないので?」「もともと京都のお方でな。お公卿さんの血を引いておられるともうわさに聞きました。が、御当人が話したがらず、わたしも深くは、たずねません」(多岐川恭『悪の絵草紙』)。

とは、下線部2の「いかにもさよう」という同意の発話が示している。この「さるお方」も、前節(3.3.1)の「どなた」の場合と同様、人が幕閣の一員であるという社会的地位の観点からすると、(64(=32))の「自己の誉れは背景化せよ、他者の誉れは前景化せよ」という行動規範を遵守することが求められる。しかし、(42)の場合と同様、発話者は、この不定表現の表現対象に敵対する立場にあり、名を出すことすら忌み嫌っている。従って、(64(=41))に示す処世訓〔背景条件〕の下で、この行動規範は敢えて遵守されずに表現対象は背景化されている。

(62) 「手配りは」

「およその仕度は整っております。あとは、さるお方に悟られぬことです」

「いかにもさよう」 (佐伯泰英『石榴ノ蠅』)(下線は引用者)

また、(62)と違って、(63)の下線部の発話の「さるお公卿」は、その表現の対象の属性は表現そのものに含まれている。そして、その表現の指示対象と名前は話者(=えび)にとっては既知であるが、聴者には未知である。(63)の場合、公卿という社会的地位の観点からすると、(64(i)(=32))の「自己の誉れは背景化せよ、他者の誉れは前景化せよ」という行動規範を遵守することが求められる。しかし、発話者は、「落としたね」を生み出す戦国時代の乱世を残念に思っている。つまり、公卿という地位そのものをむなしく不名誉なものにとらえている。従って、(65)に示す処世訓〔背景条件〕の下で、この行動規範は敢えて遵守されずに表現対象は背景化されている。

(63) 「さるお公卿の落としたねでしてね。近ごろ、そんな子が多い。乱れた時世のせいでしょうか」

半蔵は聞きながら、母親のきりを想った。きりも、〈さる高貴なお方〉の落としたねだったという。

(戸部新十郎『服部半蔵(三)』)(下線は引用者)

従って、(62)と(63)の下線部の発話の遂行に際しての、話者の志向性と志向性におけるモダリティは、「誰」や「どなた」と同様に、それぞれ、(66a)、(66b)のように表象することができる。尚、本項では、「さる方」を CERTAIN で表し、その指示対象は、CERTAIN_{ref}、名前は、CERTAIN_{nm}、属性は CERTAIN_{attrib} で表すこととする⁴⁵⁾

$$(64 = (32)) \quad \forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow \\ \text{Must}(\text{Background}(x, x\text{'s HONOR}) \wedge \\ \text{Foreground}(x, y\text{'s HONOR}))].$$

$$(65)^{46)} \quad \forall x \forall y [\text{PERSON}(x) \wedge \text{NOBLEMAN}(y) \rightarrow \\ \text{Must}(\sim \text{TELL}(x, y\text{' NAME}))].$$

(高貴な人の名前は口にしてはならない)

$$(66) \quad \text{a. } [\text{Bel}(\text{馨音}, \wedge \text{Certain}(\wedge [\text{CERTAIN}_{\text{ref}} \in \text{K1} \wedge \text{CERTAIN}_{\text{nm}} \in \text{K2} \wedge \\ \text{CERTAIN}_{\text{attrib}} \in \text{K3}])) \wedge \\ \wedge \text{Good}(\sim \text{Assert}(\text{馨音}, \wedge [\text{CERTAIN}_{\text{nm}} \in \text{K2} \wedge \\ \text{CERTAIN}_{\text{ref}} \in \text{K1}])))]^{BC \times GR} \wedge$$

45) WH の場合と同様に、指示対象 (CERTAIN_{ref}) は、表現対象の指示対象の集合 K1 の要素 (CERTAIN_{ref} ∈ K1) であり、名前 (CERTAIN_{nm}) は、表現対象に付けられた名前の集合 K2 の要素 (CERTAIN_{nm} ∈ K2) である。そして、CERTAIN_{attrib} は、表現対象の属性の集合 K3 の要素 (CERTAIN_{attrib} ∈ K3) である。

46) (65)の式は、「すべての x とすべての y に関して、x が人で、y が貴人であるならば、x は y の名前を口に出さないようにしなければならない」と読まれる。(62)の場合、「高貴な人の名前は口にしてはならない」が該当する訳ではない。人名のタブーについては森 (1971) には、「原始的な呪術思想の伝統が根強く残っている結果 (p. 12)、中国では父親の名前や天子の名前をよぶことはタブーであった (p. 15)」とある。そこでは、何故実名で人を呼ぶことが失礼になるかについても述べられている。

$$Pretend(\text{聲音}, \wedge Certain \sim (\wedge [CERTAIN_{nm} \in K2 \wedge CERTAIN_{ref} \in K1]))]_{t_0}.$$

b. $[Bel(\text{えび}, \wedge Certain(\wedge [CERTAIN_{ref} \in K1 \wedge CERTAIN_{nm} \in K2 \wedge CERTAIN_{attrib} \in K3])) \wedge \wedge Good(\sim Assert(\text{えび}, \wedge [CERTAIN_{nm} \in K2 \wedge CERTAIN_{ref} \in K1])))]^{BC \times GR} \wedge Pretend(\text{えび}, \wedge Certain \sim (\wedge [CERTAIN_{nm} \in K2 \wedge CERTAIN_{ref} \in K3]))]_{t_0}.$

関連して、類似表現に特定表現「あの方 (that person)」がある。この場合、話者と聴者が共に、その表現対象の指示対象、名前、そして、属性のいずれも既知情報として持っている。固有名を口に出さないのは、そのことが憚られるからである。この場合、「高貴な人の名前は口にしてはならない」が該当する。しかし、名前を出さないのは、貴人の来訪が人伝に漏れてはいけないからである。

(67) 聲音：「桂川先生からの言伝にござつてな、近々あのお方をこちらにお連れします」

鉄五郎：「やはりそのことにございましたか」

(佐伯泰英『石榴ノ蠅』)(下線は引用者)

従って、この場合は、(65)の背景条件に則った発話時点における志向性と志向性におけるモダリティは、(68)のように表象される。尚、本項では、「あの方」を PARTICULAR で表し、その指示対象は、PARTICULAR_{ref}、名前は、PARTICULAR_{nm}、属性は PARTICULAR_{attrib} で表すこととする⁴⁷⁾。

- (68) [*Bel* (磐音, \wedge *Certain* (\wedge [PARTICULAR_{ref} \in K1 \wedge PARTICULAR_{nm} \in K2 \wedge PARTICULAR_{attrib} \in K3]) \wedge \wedge *Good* (\sim *Assert* (磐音, \wedge [PARTICULAR_{nm} \in K2 \wedge PARTICULAR_{ref} \in K1]))))^{BC x GR} \wedge *Pretend* (磐音, \wedge *Certain* \sim (\wedge [PARTICULAR_{nm} \in K2 \wedge PARTICULAR_{ref} \in K1])))]_{t0}.

尚、「さる」や「あの」は身分を表す人名詞のみならず、屋敷などの場所名詞を後に取り、(68)に見るように、「さるところ」が類似した機能を果たす。ここでは、話者の小六は「さるところ」という表現の指示対象、名前、そして、その属性のすべてを知っている。しかし、「秘するが華」という背景条件の下で、敢えて謝礼の出所を表に出していない。この場合、謝礼は小六の懐から出ているのであるが、あたかも、秀吉の懐からでていることを伏せているかのごとく振る舞っている。具体的には、小六は、自己の美德でなく、他者の美德であることを仄めかすために、敢えて、「他者の美德を前景化せず背景化しているかのごとく」振る舞っているのである。「秀吉様からでござる」と言えば、他者の美德を前景化することになるが、小六は秀吉の分身であるから、そのように振る舞うことは自己の美德を前景化するに等しく、行動規範に抵触する。そこで、彼は、他者である秀吉を前景化せず背景化しているのである。

- (69) 「少のうござるが、ご一同に」

と小六はいった。桶狭間での働きに対する謝礼である。

「これは」

と半蔵は受け取る前に、一言たしかめた。

47) WH や CERTAIN の場合と同様に、指示対象 (PARTICULAR_{ref}) は、表現対象の指示対象の集合 K1 の要素 (PARTICULAR_{ref} \in K1) であり、名前 (PARTICULAR_{nm}) は、表現対象に付けられた名前の集合 K2 の要素 (PARTICULAR_{nm} \in K2) である。また、PARTICULAR_{attrib} は、表現対象の属性の集合 K3 の要素 (PARTICULAR_{attrib} \in K3) である。

「どこから出ましたのか」

「さるところです」

小六はさりげなく答えた。

半蔵は、さるところとは小六自身であると察している。

(戸部新十郎『服部半蔵(二)』)(下線は引用者)

従って、この場合、(70)に示す背景条件の下で、(71)に示す行動規範に則った小六の発話時点における志向性と志向性におけるモダリティは、(72)のように表象される。

(70)⁴⁸⁾ BC [社会的通念] : $\forall x \forall y [EGO(x) \wedge OTHER(y) \rightarrow$
Good ($\sim TELL(x, y, THE TRUTH)$)].
 (言わぬが^s華)

(71)⁴⁹⁾ GR [美德] : $\forall x \forall y [EGO(x) \wedge OTHER(y) \rightarrow$
Must (*Background* ($x, x'sVIRTUE$) \wedge
Foreground ($x, y'sVIRTUE$))].
 (自己の美德は背景化せよ、他者の美德は前景化せよ)

(72) [Bel(小六, $\wedge Certain$ ($\wedge [CERTAIN_{ref} \in K1 \wedge CERTAIN_{nm} \in K2 \wedge$
*CERTAIN_{attrib} \in K3]) \wedge
 $\wedge Good$ ($\sim Assert$ (小六, $\wedge [CERTAIN_{nm} \in K2 \wedge$
*CERTAIN_{ref} \in K1])))]^{BC x GR} \wedge
Pretend (小六, $\wedge Certain$ \sim ($\wedge [CERTAIN_{nm} \in K2 \wedge CERTAIN_{ref} \in K1]$)))]^{to}.**

48) (70)の式は、「すべてのxとすべてのyに関して、xが自己で、yが他者であるならば、xはyの真実を口に出さないようにしなければならない」と読まれる。

49) (71)の式は、「すべてのxとすべてのyに関して、xが自己で、yが他者であるならば、xは自身の美德を背景化し、他者の美德を前景化しなければならない」と読まれる。

4.2. どこか・どこぞのX再考

「どこか・どこぞのX」の型をとる定式の不定表現では、変項Xにはいる名詞(句)によって表現対象の属性は、すでに明示されている。従って、表現対象についての不定情報は、その指示対象と名前である。この型の不定表現は、2人称指示の場合と3人称指示の場合がある。

4.2.1. 2人称指示の場合

(73)は、2人称指示の場合で、話者は、下線部の不定称名詞句である変項Xに示されている指示対象の属性は、もとよりその指示対象が眼前の聴者であることも、彼の「宗次」という名前も知っている。しかし、彼は、あたかもそれらを知らないかのように、たわむれに、下線部の**不確定記述**(indefinite description)を用いている。この場合、話者は、「自己の名誉は背景化せよ、他者の名誉は前景化せよ」という行動規範を敢えて破って、「宗次、お主」と言わずに、それを背景化することで「何処かの腕利き浮世絵師」と名指しているのである。

(73) 宗次：「お殿様は、青忍びという大老直属の組織の実体について詳しくご存知でいらっしゃいますか」

大番頭：「詳しくとはいかぬが、ある程度はな。青忍びの存在については我ら三番の長官(頭)の間でも常日頃から危惧されておったのだ。いずれこの青忍びは解体されることになろう。なにしろ頭領で関澤照玄という大変な忍びが、何処かの腕利き浮世絵師に倒されたと扇姫様が語っておられたからのう。ふふふっ」

(門田泰明『秘剣双つ竜』)(下線は引用者)

従って、話者の志向性と志向性におけるモダリティは、(73)のように表示することができる。本項では、「どこか・どこぞX」をWHXで表し、その指示対象

は, WHX_{ref} , 名前は, WHX_{nm} , 属性は WHX_{attrib} で表すこととする。

$$(74)=(32) \quad \forall x \forall y [EGO(x) \wedge OTHER(y)] \rightarrow \\ Must(Background(x, x's HONOR) \wedge \\ Foreground(x, y's HONOR)).$$

$$(75)^{50} [Bel(\text{大番頭}, \wedge Certain(\wedge [WHX_{ref} \in K1 \wedge WHX_{nm} \in K2 \wedge \\ WHX_{attrib} \in K3]) \wedge \\ \wedge Good(\sim Assert(\text{大番頭}, \wedge [WHX_{nm} \in K2 \wedge \\ WHX_{ref} \in K1])))^{BC \times GR} \wedge \\ Pretend(\text{大番頭}, \wedge Certain \sim (\wedge [WHX_{nm} \in K2 \wedge WHX_{ref} \in K1]))]_{t_0}.$$

4.2.2. 3人称指示の場合

(76)は, 3人称指示の場合で, この話者(=お葉)は, 下線部の指示対象が, 老中田沼意次であることを知っている。話者は, 老中の後見を得ることが誉れであると捉えている。このことは, 言い換えると, 老中であることが誉れであり, その名前を出すことは, 本来, その誉れを讃えることである。これを行動規範の観点からとらえるならば, 「自己の名誉は背景化せよ, 他者の名誉は前景化せよ」という行動規範を遵守することが本来望ましい。しかし, 話者は, 敢えてこの規範を遵守せず, 「高貴な人の名前は口にしてはならない」という背景条件の下で, 名を伏せることでその後見を得ることのありがたみを伝えようとしている。話者は, 不定表現を用いて, あたかも自身が, その指示対象も名前も知らないかのように発話している。従って, 話者の志向性と志向性にお

50) (76)の式は, 「大番頭は, 発話の時点において, 不確定記述の名前や指示対象や属性が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じている。しかし, 彼は, 所与の背景条件と行動規範の下ではその名前や指示対象が自身の知識の集合の要素であることを主張しないことが得策であると信じている。また, 彼は, 不確定記述の名前や指示対象が自身の知識の集合の要素でないことが確かであるかのようなふりをしている」と読まれる。

けるモダリティは、(77)のように表示することができる。

(76) 高晃：「お葉さん、医師の女房でよろしいか」

お葉：「ただの医師ではございませんよ。どこぞの老中が後見のお医師で、
これから出世は望み次第ですよ」

(佐伯泰英『石榴ノ蠅』)(下線は引用者)

(77)⁵¹⁾ [*Bel*(お葉, \wedge *Certain*(\wedge [$WHX_{ref} \in K1 \wedge WHX_{nm} \in K2 \wedge$
 $WHX_{attrib} \in K3$])) \wedge
 \wedge *Good*(\sim *Assert*(お葉, \wedge [$WHX_{nm} \in K2 \wedge WHX_{ref} \in K1$]))^{BC x GR} \wedge
Pretend(お葉, \wedge *Certain* \sim (\wedge [$WHX_{nm} \in K2 \wedge WHX_{ref} \in K1$]))]_{t₀}.

5. ま と め

本稿は、一つの言語表現が会話において使用される際の話者の志向性におけるモダリティの研究である。

本稿では、会話における人称表現の選択に関して、1人称、2人称、あるいは、3人称といった定称の人称代名詞の代わりに「不確定性 (uncertainty)」を内包する「誰」、「どなた」といった不定称の人称代名詞表現の選択に2種類の調整行為が関わっていることを論じた。

その一つは、話者が、2人称表現の指示対象 (WH_{ref})、名前 (WH_{nm})、属性 (WH_{attrib}) のすべてを既知情報として持っているにもかかわらず、属性を除く情報についてあたかも未知であるかのように振る舞う行為として説明した。そ

51) (77)の式は、「お葉は、発話の時点において、不確定記述の名前や指示対象や属性が自身の知識の集合の要素であることが確かであると信じている。しかし、彼は、所与の背景条件と行動規範の下ではその名前や指示対象が自身の知識の集合の要素であることを主張しないことが得策であると信じている。また、彼は、不確定記述の名前や指示対象が自身の知識の集合の要素でないことが確かであるかのようなふりをしている」と読まれる。

の際「最も確定的表現を指示するためには、最も不確定な表現を用いよ」という原理がその行為の背後に働いていることを論じた。

また、もう一つは、発話が設定されている時代の社会的文化的背景〔背景条件〕に照らして、話者がその時代で尊重されている行動規範をあえて破るという行為として説明した。その際、行動規範は、話者自身の、あるいは、他者の取るべき行動を規定するものであるから、性格上、義務のモダリティを内包する。そして、それらの規範は Leech (1980) のポライトネスの公準を経済性の原理ではなく志向性の前景化と背景化の理論によって日本文化における行動様式が説明可能なように改変した。

以上の観察と議論は、会話における人称表現の選択に関して、定称人称代名詞の代わりに不定称の人称代名詞を選択する際には、モダリティの観点からすると、「不確定性のモダリティ」「評価のモダリティ」と「義務のモダリティ」が関与していることを示唆していると考えられる。

参 照 文 献

- Dowty, D. R. 1979. *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht : D. Reidel Publishing Company.
- Dowty, D. R., R. E. Wall and S. Peters. 1981. *Introduction to Montague Semantics*. Dordrecht : D. Reidel Publishing Company.
- 久保 進. 2012a. 「志向性の前景化と背景化」, 吉村あき子, 須賀あゆみ, 山本尚子 (編著) 『ことばを見つめて』 95-107, 東京: 英宝社.
- 久保 進. 2012b. 『言語行為と調整理論』 (博士論文), 関西外国語大学.
- 久保 進. 2013. 「調整理論とモダリティー・‘We’ の志向性をめぐって」, 『科学研究費補助金によるモダリティアークショップ—モダリティに関する意味論的・語用論的研究予稿集』, 67-86.
- Kubo, S. 2013. “Zero degrees of certainty – Telling a lie and regulation.” In *Proceedings of the International Modality Workshop vis Grant-in-Aid for Scientific Research*, Vol. 3, 35-54.
- Leech, G. N. 1980. *Language and Tact*. Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins.
- 森三樹三郎. 1971. 『「名」と「恥」の文化』 東京: 講談社.
- Searle, J. R. 1995. *The Construction of Social Reality*. London : Penguin.
- Spencer-Oatey, H. (ed.) 2009. *Culturally Speaking – Culture, Communication and Politeness*

Theory. New York : Continuum International.

引用文献

- 芦川淳一. 2010. 『おいらか俊作江戸綴り 雪消水』東京：双葉社.
 池波正太郎. 1978. 『剣客商売 待ち伏せ』東京：新潮社.
 池波正太郎. 1991. 『鬼平犯科帳 (二十一)』東京：文藝春秋.
 池波正太郎. 1991. 『鬼平犯科帳 (二十四) 特別長編 誘拐』東京：文藝春秋.
 門田泰明. 2009. 『命賭け候 浮世絵宗次日月抄』東京：徳間書店.
 門田泰明. 2012. 『秘剣双ツ竜 浮世絵宗次日月抄』東京：祥伝社.
 川内康範. 1958. 『月光仮面は誰でしょう』東京：宣弘社プロダクション.
 小松重男. 1993. 『やっそこ侍』東京：新潮社.
 佐伯泰英. 2000. 『古着屋総兵衛影始末一 死闘』東京：新潮社.
 佐伯泰英. 2004. 『居眠り磐音江戸双紙 朔風ノ岸』東京：双葉社.
 佐伯泰英. 2004. 『居眠り磐音江戸双紙 朝虹ノ島』東京：双葉社.
 佐伯泰英. 2005. 『居眠り磐音江戸双紙 驟雨ノ町』東京：双葉社.
 佐伯泰英. 2006. 『居眠り磐音江戸双紙 捨雛ノ川』東京：双葉社.
 佐伯泰英. 2008. 『居眠り磐音江戸双紙 石榴ノ蠅』東京：双葉社.
 坂岡 真. 2004. 『照れ降り長屋風聞帖 大江戸人情小太刀』東京：双葉社.
 多岐川恭. 1975. 『悪の絵草紙』東京：講談社.
 戸部新十郎. 1987. 『服部半蔵 (一) 〈花の章〉』東京：光文社.
 戸部新十郎. 1993. 『服部半蔵 (二) 〈草の章〉』東京：光文社.
 戸部新十郎. 1993. 『服部半蔵 (三) 〈石の章〉』東京：光文社.

付録

1) 本稿で言及した背景条件

i. 処世訓 : $\forall x \forall y [\text{PERSON}(x) \wedge \text{IDEA OF SHAME}(y) \rightarrow$
 $\text{Must}(\text{Respect}(x, y))]$. [恥を重んじよ]

ii. 処世訓 : $\forall x \forall y [\text{Ego}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow$
 $\text{Must}(\text{Respect}(x, y's \text{ FACE}))]$. [他人の面子を重んじよ]

- iii. 処世訓： $\forall x \forall y [\text{Ego}(x) \wedge \text{Other}(y) \wedge \text{SUPERIOR-TO}(y, x) \rightarrow$
 $\text{Must}(\sim \text{FIGHT-AGAINST}(x, y))]$. [長いものには巻かれる]
- iv. 社会的通念： $\forall x [\text{PERSON}(x) \wedge \text{BE-DILIGENT}(x) \rightarrow$
 $\text{Must}(\text{Be-Respected}(x))]$. [謹厳実直を重んじよ]
- v. 社会的通念： $\forall x [\text{ADULT-MALE}(x) \rightarrow \text{Must}(\text{INDEPENDENT}(x))]$.
 [成人男性たるものは、自立しなければならない]
- vi. 社会的通念： $\forall x [\text{PERSON}(x) \rightarrow \text{Good}(\text{HAVE-A-BIG-APPETITE}(x))]$.
 [人が食欲があることは良いことである]
- vii. 社会的通念： $\forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow$
 $\text{Good}(\text{SHARE}(x, y\text{'s PLEASURE}))]$.
 [仲間の間で互いの喜びを共有することは良いことだ]
- viii⁵²⁾ 社会的通念： $\forall x \forall y [\text{PERSON}(x) \wedge \text{NOBLEMAN}(y) \rightarrow$
 $\text{Must}(\sim \text{TELL}(x, y\text{' NAME}))]$.
 [高貴な人の名前は口にしてはならない]
- ix. 社会的通念： $\forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow$
 $\text{Good}(\sim \text{TELL}(x, y, \text{THE TRUTH}))]$.
 [言わぬが華]

52) ベネディクトは、世界の文化を「罪の文化」と「恥の文化」に大別し、日本の文化を後者に分類した。森（1977）は、このベネディクトの分類を支持している。と同時に、「恥」と表裏一体の関係にある「名」について中国文化を引き合いに出して、その重要性を詳細に解説している。

x. 制度： $\forall x \forall y [\text{APPRENTICE}(x) \wedge \text{APPRENTICESHIP}(y) \rightarrow$
 $\text{Must}(\text{Respect}(x, y))]$.

[奉公人は徒弟制を尊重しなければならない]

2) 本稿で言及した行動規範

i. 恥： $\forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow$

$\text{Must}(\text{Foreground}(x, x\text{'s SHAME}) \wedge$
 $\text{Background}(x, y\text{'s SHAME}))]$.

[自身の恥は前景化にせよ、そして、他者の恥は背景化せよ]

ii. 誉れ： $\forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow$

$\text{Must}(\text{Background}(x, x\text{'s HONOR}) \wedge$
 $\text{Foreground}(x, y\text{'s HONOR}))]$.

[自身の誉れは背景化にせよ、そして、他者の誉れは前景化せよ]

iii. 美徳： $\forall x \forall y [\text{EGO}(x) \wedge \text{OTHER}(y) \rightarrow$

$\text{Must}(\text{Background}(x, x\text{'s VIRTUE}) \wedge$
 $\text{Foreground}(x, y\text{'s VIRTUE}))]$.

[自己の美徳は背景化せよ、他者の美徳は前景化せよ]

iv. 喜び： $\forall x \forall y [\text{SP}(x) \wedge \text{HR}(y) \wedge x \neq y \rightarrow$

$\text{Must}(\text{Background}(x, x\text{'s PLEASURE}) \wedge$
 $\text{Foreground}(x, y\text{'s PLEASURE}))]$.

[自身の喜びは背景化せよ、そして、他者の喜びは前景化せよ]